

無限の玄

Natsuki
Koyata

古谷田奈月

月夜野で死んだ。

ここ最近の本人の様子、あるいは現時点の状況で何か不審に感じることはあるかと刑事に訊かれたとき、まずそのことが浮かんだ。家というものを嫌うあまり放浪生活を続けた父が、それでも唯一「帰る」と表現できる場所、どこにいても六月には必ず戻る生家で死ぬというのは、どうも感傷的すぎる気がした。それも、父一人が予定より五日も早く月夜野入りしたのだ。まるで死期を悟って死にに帰ったかのようだが、その手の望郷は、父に限ってあり得なかった。

刑事には、しかし、結局そうは言わなかった。本田という名のその刑事は、兄と同じ三十代半ばと思しき年頃の男で、リビング中央に倒れた父の体をざっと調べ、縁側の隅に転がって

たロックグラスを拾い上げると、滑って頭を強打したか脳卒中を起こしたのだろうと言った。検視官は死後二日経っていると見積もった。

リビングのソファに兄と僕と千尋ちひろを横並びに座らせると、本田は向かいに一人だけで腰を下ろして、必要な手順なので断ってから事情聴取を始めた。誰かに電話をかけながら二階へ向かう叔父のことは、ちょっと目で追っただけで逃がした。

あらためてお悔やみの言葉を述べてから、「おいくつですか?」と本田はまず言った。

「二十八だ」千尋がすぐにそう答え、「六十三だ」と踏みつけるように兄が答え直した。

二人のあいだで曖昧な笑みを浮かべた僕に、本田は鋭い一瞥

をくれ、「ご病気などは？」

「さあ、と兄は硬い声で返した。「何かあったのかもしれないけど、本人も知らなかったと思う。具合が悪くても黙ってるか、自分でも気付かないタイプだったから」

「お父さんはお一人で？」

「おひとり？」不意に、声がいきり立った。いや、としかしすぐに静まって、「一人じゃない。いつも俺たちと一緒にだった」と兄は答えた。「この家はもともと俺たちの爺さんの家で、今は親父と、叔父と、俺たちの五人で住んでるんだ。住んでる、というか年に一度、こうして帰るだけだ。というのは、爺さんが若い頃に始めたブルーグラスバンドを家族みんなで引き継いでて——ブルーグラスって、カントリーミュージックに似てる、古臭い音楽なんだけど——それが野外演奏中心で、全国あちこち回ってるもんで、この家にいるのは毎年だいたいこの時期だけなんだ。六月いっぱい、長いときは七月の半ばまでここで休んで、夏になったらまた次のツアーに出る。繰り返しだよ」そこで兄はふと気付いて、自分が死んだ玄の長男の律で、僕が次男の桂、千尋は叔父の喬の息子だと説明した。

本田は頷き、質問を続けた。「今回、お父さんだけ先に戻られたのは？」

「たまたまとしか言えない。ライブスケジュールは消化してたから、バンドとしてはもう帰るだけだった。でも俺と弟たちは横浜のラジオ局に呼んでもらってたし、叔父も都内で人と会う約束があった。叔父は別で作曲の仕事もやってるんで、その関係で。だから親父だけ先に、新宿からバスで帰ったんだ。俺た

父の死に事件性はない、という最初の見立てを、本田は結局変えなかった。正確な死因は詳しい検査で明らかになるだろうと言いつ残し、父の遺体を連れ、一時間ばかりで引き上げていった。

「お前らはどうか知らんが、俺は自分の親父が嫌いだ」

子供の頃、千尋が泊まりに来た晩などによく、父はそう話した。小さな明かりを一つだけつけた子供部屋に、父のだみ声はよく馴染んだ。

「俺の親父には昔っからヒッピーじみたところがあって、家にわんさと連れてくる音楽仲間もまさにその類だった。ヒッピーじみた感じって、お前らわかるか。こうダルい感じの服を着て、手首にわさっとヘンプアクセサリーをつけてよ、生まれる前からの友達って感じに話しかけてくるんだ。調子どうだ、げーん？ ごきげんかよ、げーん？」

僕と千尋は二段ベッドの上段で、兄は下段でケラケラ笑い、げーん、げーん、と真似た。

「とにかくイラつく連中だよ」父はにやりと笑った。兄の勉強机に腰掛けた父の顔が——若い頃の喧嘩で折ったという左上の犬歯の、その黒くぼっかりと空いた穴が、ベッドの柵越しに見える。「ミュージシャンってのはだいたいそうだ。愛と平和を信じてる。音楽は人と人とを繋ぐためのもんだと心の底から信じてるんだ。だから連中がげーんげーんと酒を飲み、煙草を吸い、べちゃべちゃと喋ったあとで始める演奏はいつだってゲ

ちより……」

兄を見つめる本田を見つめ、僕は呟いた。「五日早く」「五日早く」視界の左端で、兄は頷いた。「車のエアコンが壊れてからずっとイラついてたし、俺たちの予定に振り回されるのも気に入らなかつたんだと思う。まあ、疲れてたんだろな」

本田は何やら手帳に書き留めながら、「そのとき、何か様子がおかしいと感じました？」

「様子は常におかしかったよ、そのときに限らず」僕と千尋はそこで儀礼的に笑ったが、「今の質問がもし、自殺の線も考えられてるって意味なら——」と兄は表情を変えずに続けた。「探るだけ無駄だと思いますよ。うちの親父は自殺するほど感傷的にはなれない。その点に関しちゃ病気だったと断言できるな。アレギー体質だったんだよ」足を組み、兄は初めて刑事に笑いかけた。「玄がアレギーを起こすのはこの三つだ。センチメンタリズム、ロマンティズム、それからノスタルジー」

僕と同じ違和感を、兄も抱いていたのかもしれない。その思いは、しかし安堵ではなく、漠然とした不安に通じた。うつむくと、右隣に座る千尋の左手が目に入った。膝の上に投げ出されたその手の、黒い梵字の彫られた指が、一瞬、震えたように見えた。

顔を上げると、いきなり本田と目が合った。怯んだが顔には出さなかった。彼は目だけをゆっくりと左右に動かし、兄と千尋も同様に見、静かに息を吐きながらペンを内ポケットにしまった。

口の臭いがした。自分で吐いた息を自分で吸って生きてる連中の音だ。俺はそういう中でギターを覚えた。とんでもねえ地獄にいるぞと、自分でちゃんと気付くまでな」

父の声から上っ調子がなくなっていくのに合わせ、僕らの笑いもおさまった。部屋の暗さまで深まったのか、父の顔も、もう表情までは見取れなかった。「誰かが弦をはじいたらセッションの始まり」と、その暗さに見合う声で父は囁いた。「あの胸糞悪い文化のために、親父は辺鄙な場所に家を建て、俺と喬に音楽を教えた。愛と平和、夢、希望、生まれてきたことの喜び。親父がそう呼んで信じる、でも俺には毒でしかなかったものを、長年与えられて育った。奴はとうとう理解しなかったが、俺がギターを覚えたのは音楽を愛したからじゃない。俺のギターと親父のマンドリンは常に別の場所で鳴る。俺は音楽が嫌いだ。俺は家が嫌いだ。俺は親父が嫌いだ」

最後はどこか詩のように、言葉の繋がりがおぼろになるのが、僕らに眠りの時を告げた。

明かりを消すと、父は暗闇から手を伸ばしてきた。僕はその大きな手が頬に触れるが早いか指に噛みつき、それからすぐ、父が叩きやすいよう頭を差し出した。隣の千尋は僕らがたてる物音を笑い、自分は素直に撫でられた。下の段の兄はたぶん、胸の上に手を置かれるか、闖越しに無言のメッセージを受け取っていた。おやすみがわりに父はいつも、ぎくりとするほどの命令口調でこう言った。いい夢見ろよ。

その父が死んだ。窓から差し込む午前十一時の光を浴び、白濁した目には瞳孔がなく、萎んだ唇は内側に巻かれ、リビング

の中央に仰向けに倒れた体はどこも乾ききっていた。

あんな姿をこれまで一度も見ることがないのになぜ父だとわかったのだろうか、叔父と兄が刑事たちを見送りに行き、千尋と二人だけになったリビングで、僕は発見時のことを思い出していた。誰も驚かず、ただ黙って、四人でしばらく父を取り囲んでいた。いつ死んでもおかしくない人間だという了承は父以下全員にもうずっと前からあったが、僕らにそう思わせた日頃の激しさ——誰彼構わず喧嘩をふっかける、興奮すると屋根からでも、走行中の車からでも飛び降りる——を思うと、予想外に静かな死だった。

そこで偶然、同時にふうとため息をつき、千尋と顔を見合わせた。いくらか血の気のないほかは、普段と別段変わりのないそばかす面だった。ただ少し頼りなげに、じっとこちらを見つめてくるのは、おそらく目下の振る舞いについて——しんみりすべきか、明るく笑うか——迷っているためだった。僕に合わせようという受け身の意思が見て取れ、同じ意思でもって僕は兄の姿を探したが、ちょうど叔父と一緒に玄関のほうから戻ってきた兄はしかしこちらには目もくれず、何やらぼそぼそ喋りながら隣の和室に入ってしまった。

「一人だったな」結局、千尋が先に口を開いた。「刑事ってのは、俺は、絶対に二人組なんだと思ってた」

「誰も組んでくれないんじゃないか」僕が言うと、千尋は低く笑った。「それより、俺は全員しょっ引かれるかと思った」

「ああ、俺もそう思った」
「なんでそうならなかったんだらう」

父がまさにその場所で立ち止まったので、ああもう、あーあー、と僕は笑った。

その笑い声の中、最初に楽器を手にしたのは兄だった。襖越しに聴いていたらしい『ヨソロー』をフィドルでやりだし、「ビール出せ、ビール」と言った。そしてとうとう、周知のことではあるがどこか曖昧に揺れていた事実を、突き立てるよう宣言した。「玄が死んだぞー」

僕と千尋は歓声をあげた。車の冷蔵庫から運んできたばかりの小瓶を五本、カウンターに並べて栓を抜き、叔父に一本渡したほかは自分たちで持って打ち合わせた——玄さん、おめでとー！ それから兄に加わって、考え得る中でもっとも激しいやり方で『ヨソロー』を荒らした。転がる車輪、賑やかし、僕と千尋のバンジョーの、それが元来の役割でもあった。《さあ船出だ ヨソロー》僕と千尋は大声を張り上げた。《ごきげんかよ げーん？》

兄は帰ってきてから初めて声に出して笑い、それでも決して弾くのをやめず、二頭立て馬車の御者のように僕らを次の曲へ誘導した。飲む時間を作れ、ビールがぬるくなると僕らが文句を言うとなすすます嬉しそうにした。叔父はなかなか演奏に加わろうとしなかったが、夕方近くになると誰に相談することもなく特上の寿司を取り、それにつられてやっと楽器を手放した僕らに、また喪服の話をするかと思っただろうと言った。きのう完成した新曲を聴くか？

祖父が静かな月夜野の、この利根川沿いに家を求めた心そのものの晩だった。弦の音はいつまでも響き、歌声と、笑い声を

「満室なんじゃねえか」今度は僕が笑った。

それから千尋は寝起きのように伸びをして、さて、やるかあと大声を出した。それを聞いて僕はようやく、自分たちが長旅から帰ってきたばかりであることを思い出した。戻ったばかりの家では、休息より先に仕事が行っている。窓という窓を開け、埃を追い出さねばならない。布団を干し、家具や床を拭かねばならない。台所から虫を、換気扇から鳥を、ガレージから蝙蝠を追い払わねばならないのだ。

確認してみるまでもなく、父はそうした仕事にいつさい手を付けていなかった。帰ってから死ぬまでの三日間、必要最小限の範囲で小ちんまりと生活していたようで、ポストの中の郵便物さえ取り出していなかった。しかし例年どおりのその作業に取りかかってみると、父の死によって一瞬、確実に硬直した時間が、再び巡り始めるのを感じて僕はたちまち調子が良くなった。今夜自分たちが眠るために、僕と千尋は景気よく家を起こし始めた。

《さあ船出だ ヨソロー》キャンピングカーから叔父のウッドベースを運び出しながら、僕は歌った。《ヨソロー ヨソロー》と先を行く千尋もすぐ乗って、それしか歌詞のないその歌を、僕らは延々歌い続けた——《さあ船出だ ヨソロー ヨソロー ヨソロー！》

ダイニングを通り、休暇中の練習場所になるリビングに入ると、おい玄さんを踏んでるぞと千尋が言った。父の死に場所は踏んではいけない、というルールがその一言でできあがったが、お前ら喪服なんて持ってたかと言いながら和室から出てきた叔

絡げて遠く赤城山まで伸びた。一度も会ったことのない祖父を思うことを、父が憎むたびに不思議と募った親しみを、父にはもうどうすることもできないのだと思うと嬉しかった。

祖父の作った百弦^{ひゃくげん}という名のストリングバンドは、本来は叔父に——叔父だけに——託されたものらしい。祖父は国内のブルグラス界では名のあるフラットマンドリン奏者だったが、叔父はおそらくその祖父以上に音楽的才能に恵まれた人で、父の証言によると、音大に入る頃には弦楽器に限らずほとんどすべての楽器を演奏できたということだ。その後興味は作曲に向き、父曰く、「芸能業界というダークサイドで荒稼ぎすべく」歌手やアイドルグループに楽曲を提供するようになったが、亡くなる直前の祖父からバンド相続の件を持ちかけられるとあっさり承諾したという。

「だって本業にする気はなかったからな」と叔父はそう言っていた。「親父は入院をきっかけに音楽事務所との契約を切ったから、それならのんびりやれると思ったし、家や土地なんかよりそういう実体のない、曖昧なものを受け継ぐほうがおもしろいような気がしたんだよ」

そこに父が転がり込み、当然の顔でリーダーの座に就いた。不思議に思った叔父は言う。父がなんのあてもないまま十八で生家を出ていったのは、叔父の理解では、祖父と祖父の音楽から離れるためだった。根本から性質の違う二人が日々激しくぶつかり合うのを見て、そのほうがいいとも思った。以来、父